

## 第8回 国際サゴヤシシンポジウム エクスカーションに参加して

新田洋司

茨城大学農学部 〒300-0393 茨城県稲敷郡阿見町中央 3-21-1

第8回国際サゴヤシシンポジウムのエクスカーションが、2005年8月6日（土）に行われ、約30名が参加した。このエクスカーションではおもに2箇所を訪問した（表1）。

最初の訪問地は、ジャヤプラ市内からバスで40分ほど走ったところの、Cyclop山の山頂に近いマッカーサー記念碑であった。このマッカーサーとは、太平洋戦争直後、連合国最高司令官として日本に駐在したアメリカ陸軍軍人であるが、戦時中はこの地に妻とともに一時駐在し、最前線で米軍の指揮をとったという。そして、日米間の激戦がくり広げられたと聞いた。この地は、マッカーサーの記念碑以外に、Sentani湖を見下ろす展望台になっていた。しかし、ふだんから天気の移り変わりが激しいそうで、我々が訪問したときには、雲の切れ間からわずかに湖が見られる程度であった。

2番目の訪問地は、Sentani湖畔のYoboi村であった。港では「ようこそいらっしゃいました。こくさいシンポジウムサゴ。ヨボイムラニ」と、ひらがなとカタカナが交じった日本語で書かれた横断幕が張られ、村民による歌と演奏、それに弓矢をこちらに向けた原住民風のパフォーマンスに迎えられた。歌と演奏がつづくなか、Marten Tokoro村長があいさつを述べたが、途中、感極まって言葉がつかまっていた。そのあと、2本

のサゴヤシ樹が伐採され、2つの伝統的なデンプン抽出方法の実演が行われた。

伐採されたサゴヤシ樹は、湖岸側がYepha Hongleu（トゲなし、髓は白い）、奥がPara Hongleu（トゲあり、髓は赤っぽい）であった。いずれも樹幹が10mほどの長さであった。Yepha Hongleuは、バークが剥がされたあと、50～60cmほどの丸太に切断され、さらに斧で“薪”（まき）のように細断されて磨砕機にかけられ、細かく粉砕された。Para Hongleuは、樹幹全体が真っ二つに縦割りにされ、露出した樹幹断面を“ちょうな”のような道具（長さ50cmほどの柄の先に、長さ30cmほどの引っかけ棒が直角に付いている）を使って掻き出すようにして削り出された。この“ちょうな”による髓の削り出し作業は、エクスカーション参加者も実際に体験することができた。著者も体験したが、サゴヤシの髓は想像以上に軟らかかった。

12時ごろになり、エクスカーション参加者に弁当が配られた。Sentani湖に通じる川をボートで上る“ミニツアー”も行われた。

村長によるとYoboi村の人口は121人で、水上生活を送っている。当日は、近隣の集落からも人々が集まったのか、200人以上の人々からの歓迎を受けた。なお、同村へは、約20人の警察官が我々に同行し、警備にあたっていた。

表1 エクスカーションの行程。

時刻	行程
8時ごろ	参加者が宿泊するホテルを3台のバスで出発
9時	Cyclop山の中腹にあるインドネシア軍の練兵所を通って、山頂に近いマッカーサー記念碑（Ihar）着。
10時	Sentani湖畔の港着。3艇のボートに乗り換える。
10時15分	Yoboi村の港着。歓迎を受ける。Marten Tokoro村長のあいさつのあと、サゴヤシの伐採からデンプン抽出過程の実演。
12時50分	Yoboi村の港発。
14時ごろ	Jayapra市内の各ホテル着。

12時50分頃、再び舟に乗って同村を離れることになった。村民との別れを惜しんだ。村民は歌と演奏で我々を送り出してくれた。港を離れて湖上に出ても、しばらくの間、歌や演奏がやまなかった。



図1 Cyclop山にあるマッカーサー記念碑 (Ihar).



図2 マッカーサー記念碑の展望台から Sentani 湖を望む。ふだんから天気の移り変わりが激しく、我々が訪問したときには、雲の切れ間からわずかに湖が見られる程度であった。



図3 Yoboi村の港に到着。「ようこそいらっしゃいました。こくさいシンポジウムサゴ、ヨボイムラニ」とひらがなとカタカナが交じった日本語で書かれた横断幕が見える。



図4 村民による歓迎の歌と演奏。歓迎式が始まっても、しばらくつづいていた。



図5 Yoboi村のMarten Tokoro村長のあいさつ。



図6 変種Yepha Hongleu (トゲなし、髓は白い、樹幹約10m)の伐採と髓の粉碎。バークが剥がされたあと (A)、50~60cmほどの丸太に切断され (B)、さらに斧で“薪”(まき)のように細断されて磨砕機にかけられ、細かく粉碎され



図7 変種Para Hongleu (トゲあり、髓は赤っぽい、樹幹約10m)の伐採と髓の削り出し。斧と長い棒を使って樹幹全体が真っ二つに縦割りにされ (A)、露出した樹幹断面を“ちょうな”のような道具(長さ50cmほどの柄の先に、長さ30cmほどの引っかけ棒が直角に付いている)を使って掻き出すようにして削り出された (B)。削り出された“おがくず”状の髓は、サゴヤシの葉で編んだ籠に集められた (C)。



8

図8 デンプンを抽出する装置。“とい”に“おがくず”状になった髓を入れ、時々水をかけながら、目の粗い布に押し当てて、デンプンを含んだ水を手で濾し出す。布をつり下げている手前から伸びている“棒”はサゴヤシの葉の葉軸，“とい”のようなものはサゴヤシの葉の葉鞘。



10

図10 デンプンの沈殿槽。布でできており、デンプンとともに濾し出された水が抜かれた状態。このデンプンはややピンク色をしている。



9

図9 “とい”に入れられた“おがくず”状にな